

第2回小田原城天守閣耐震改修等検討委員会議事録

- ◆ 日 時 平成23年10月20日(木) 午後1時30分から3時30分まで
- ◆ 場 所 小田原市郷土文化館会議室
- ◆ 出席者 23名(委員:8名、事務局:8名、オブザーバー:7名)
 - <委員> 榎谷委員長、後藤副委員長、小出委員、鳥居委員、西委員、矢島委員
飯沼委員、石川委員
 - <事務局> 山崎経済部長、長谷川経済部副部長、宮坂経済部管理監、杉本観光課長、
穂坂観光課城址公園担当副課長、諏訪間専門監、二見城址公園係長、横井主査
 - <オブザーバー> 文化財保存計画協会 矢野代表、赤澤主任研究員、湯本技術員、崔技術員
大島文化財課副課長、志村建築課建築係長、飯沢建築課施設計画係長
- ◆ 傍聴者 3名
- ◆ 次 第
 - 1 議題
 - (1) 平成元年度天守閣耐震診断の検討について
 - (2) 天守閣復興の経過とその根拠資料について
 - (3) 天守閣の基礎資料の収集について
 - (4) その他
 - 2 その他
- ◆ 概 要
 - 1 開会(榎谷委員長)

それでは、これより第2回小田原城天守閣耐震改修等検討委員会を開催いたします。
 - 2 会議の公開等について(要旨)

榎谷委員長より、会議公開の原則について説明がなされ、今回も公開とすることで了承された。(傍聴者入室)
 - 3 自己紹介

参考資料1の順に自己紹介がなされた。その後、参考資料2の順に、事務局及びオブザーバーの自己紹介を行った。

4 議事（議事進行：榎谷委員長）

榎谷委員長

議題の前に、設置目的や課題について確認しておく。

第1回の会議に市長が来てお話をいただいたが、大きい目標として、耐震性能が不足しているので、それに対してどのような工法によって耐震改修を行うかが第1の課題であり、2点目として、展示物がたくさんあり、展示のリニューアルをどのように行うかについてが議題の1つ、もう1方では、元の姿に戻したいという希望が地元から出ているようであるが、木造で再建するということを含めてこの委員会で議論したい。

耐震改修を進めて、少し長持ちさせて、限度がきたら木造に変えていくということだと思うが、木造で再建するとなると、様々な面で時間がかかると思うので、それまで天守閣を安全に保たないといけない。木造で再建できなければ、他の方法も検討しないとイケない。

ということで、様々な委員の専門的な観点から意見をいただき、また、市民代表からは市民の目線でご意見をいただきたい。

天守閣の大きな課題の2つの課題と、再建ということがあるが、委員会として方向性を決めて、3月いっぱいまでにまとめるので、よろしくお願ひしたい。

(1) 平成元年度天守閣耐震診断の検討について

事務局より資料1について説明がなされた。(要旨)

- ・平成元年に(株)構造計画研究所に委託し、「構造調査」「仕上調査」を実施
- ・P12 地盤について、天守台の乗っている地盤は比較的良好である。
- ・P22 横筋が少ないので構造上弱い(25cm間隔)
- ・P25 石垣が出てきたため、設計変更し、当初30cmの杭の予定を、直系180cmの杭を2本入れた。
- ・P1(診断結果概要、総合的考察) 壁量が少なく、せん断筋量が少ないため、構造耐震指標値が低くなっている。増し打ちコンクリートによる構造耐震力の向上及び中柱の鉄板巻きによる構造耐震力の向上を行いなどが望ましい。

《質疑応答の要旨》

榎谷委員長

建物の性能をみる際には、コンクリート強度が重要である。コアコンクリートをサンプリングし、試験を行うが、その結果がP2にある。左側が圧縮試験だが、3Fが155、2Fが310、1Fが182となっている。設計強度からすると、2Fはよいが、3Fが不足している。

シュミットハンマー法もあるが、表面強度しか分からないので、あまり信用できないので、あくまで参考としてみる程度である。

中性化も重要である。アルカリ性が中性に変わってしまうと、鉄筋が錆やすく

なるので、どの程度中性化がされているかも重要。P8にあるが、赤くなっているところが中性化したところである。中性化深さが深いところが進んでいるところとなるが、P11をみると、それほど進んでいないということになる。

地盤も重要となる。概ね10m以内のところ弱いようだが、10m以上は固い。杭は10m以上で支持地盤までいっている。

P15にIS値が出ているが、○で書いてあるところが低い。それ以外はまずまずと思われる。平面図のX方向（横方向）から揺れがきた場合と、Y方向（縦方向）からきた場合とある。通常の建物はIS値が0.6以上あれば大地震に耐えるとなっているが、天守閣という重要な施設なので、係数を上乘せして高いレベルで評価する必要があるとのことで、0.7以上はほしいという意味で、○がついていると思われる。

それによると、それほど悪くない。一番低いので、Y方向のM2で0.43、0.3以下だと耐震補強が可能なレベルではないが、0.43であれば、耐震性能の向上が図れる程度である。

全体的には、1FからM3までが悪い、B1と最上階はよい。

また、天守閣は台地の上に立っているので、大きな地震力が入ってしまう。平地に立っているより条件的に悪い。石垣が杭に悪影響を与える可能性もある。台座になっているので、石垣が崩れないような配慮をする必要もある。

杭が既成コンクリート杭となっているが、鉄筋コンクリート杭とプレストレストコンクリート杭（遠心分離機にかけたもの）とあるが、RC杭だと弱い。どちらか分かるか。年代的にはRC杭を使っている可能性が高い。次回耐震診断を行うときには、杭のチェックもしてもらった方がよいのではないか。

後藤副委員長

診断をやり直すとする、一般診断はISでやるが、大勢の入館者が入る施設であり避難安全のこともあるので、躯体の安全を保つのは勿論のこと、それに加え、周辺の非構造部分で躯体に付随する部分の、1F2Fの底の回りの部分も振り回されて壊れてしまう危険があるので、その点もチェックをしておいた方がよいのではないか。昔のように天守閣に誰もいないならよいが、相当な人数が入ることを考えると、非構造壁の破壊でも、パニックになることもあるので、その点も注意した方がよいのではないか。診断というよりは、補強後の話かもしれないが。

榎谷委員長

通常は、耐震診断をするときに大きなはね出しがあると、上下動があると落ちこちてしまうことがある。概ね2m以上のはねだしがあるとチェックしてもらっている。大きなスパンでは上下動で落ちてしまうこともあるので、梁のチェックもしてもらった方がよいのではないか。

西委員

資料について質問がある。P14～26は建設工事の図面か。

事務局

平成元年に耐震診断をしたときに作成した図面である。

榎谷委員長

元の図面の、意匠図はあるか。構造図はあるか。

事務局	意匠図はあるが、構造図は現在発見されていない。
赤澤主任研究員	現在調査しているのは、構造計画研究所が作成した報告書にある資料の中に含まれていた図面である。
西委員	P27 からは実測図か。
赤澤主任研究員	現状実測図である。
西委員	現状実測図であるとする、最初の建設工事の図面はないのか。
事務局	建設した直後の構造図は、現在手元にはない。
西委員	構造計画研究所にはないのか。
事務局	確認していない。
西委員	一生懸命検討している訳であるので、建設当時の図面を手に入れないといけないのではないか。
槇谷委員長	松井建設に残っている可能性もあるので、聞いてみたらどうか。 構造計算書や構造図はなかったのか。鉄筋が一杯リストにでているが、鉄筋探査で調べたものではなさそうだが。
赤澤主任研究員	鉄筋探査は多少行っていると思うが、何か資料がないと、ここまで細かいものは出せないと思われる。
事務局	至急手に入れるようにしたい。
穂坂副課長	先程の P C 杭か R C 杭かというところだが、P13 に小さく R C 杭と入っているので、R C 杭だと思われる。
鳥居委員	建築についてはよく分からないが、P12 で支持地盤が東京軽石層だと言っていたが、P3 のボーリングによって把握した地質層序表のスコリヤ質が東京軽石層であるか。
矢島委員	これは関東ローム層である。軽石流堆積物が東京軽石層である。東京軽石層は、降ったものと流れたものがあるが、これは流れたものである。
鳥居委員	11m の杭を打っているとすると、関東ローム層のところまでしか杭が入っていないということか。
矢島委員	P13 の右側をみると、1800 の杭が、東京軽石層までギリギリ届いていると読み取れる。ただ、D-D ‘でみると、真ん中の 1 本はギリギリ届いているのか浮いているのか微妙である。かなりの部分が硬い地盤まで届いているように読み取れる。
鳥居委員	P3 (i) の分布深度は、11m の杭だとすると届かないと思うが、数字が正確でないのか。
事務局	分布深度については、1 F のフロアレベルをベンチマークとしての図面になっている。
後藤副委員長	杭は地下レベルからいっている、杭の長さは 11m だが、実際にはゼロより下にいっている。ゼロは基準レベルでゼロにしているので、そこが杭の頭面ではない。
矢島委員	P13 の図面でみると、-6m か -6.5m くらいのところからいっているようであ

赤澤主任研究員	る。 後藤先生のおっしゃったとおり、P3の分布深度はベンチマークの1Fの床レベルからの深度である。杭を打ち始める高さは、更に6mから7m下がったところからである。そこから11mの杭の長さが地中に入っていることになる。そのように見ていただくと、固い地盤に杭が届いているという調査結果が出されている。
槇谷委員長	場所打ちコンクリートの場合はたたいて確認できる。多分11mは間違いはないと思うが、今日初めて見た図面なので、後でじっくり確認したい。

(2) 天守閣復興の経過とその根拠資料について

事務局より資料2について説明がなされた。(要旨)

- ・木造再建の可能性を検討する上でも基礎的な作業となる。その中間報告として、現段階で集められてものの報告をさせていただきたい。
- ・資料2、藤岡先生が設計をするのに使ったと思われる資料(古写真、4点の模型、5点の古図)
- ・古写真については、1層目の解体中のものだが、現在ある唯一のもの。4点の模型、古図は図面的なもの。P3に検討作業を載せてある。最終的には、総体的意匠には東大模型、平面的規模は大久保神社模型、高さは東大模型及び大久保神社模型の中間、地下室を設ける、4階に廻縁、高覧をつけるとなった。
- ・藤岡先生の書かれた昭和27年の論文と、西委員のコラムをつけてある。
- ・以上が復興天守閣の根拠資料だが、西委員からよろしければ聞かせていただきたい。

槇谷委員長	西委員から藤岡先生の設計の考え方の解説をいただきたい。
西委員	小田原城の設計の時点ではまだ学生で、研究室には入っていなかった。その後追加工事のときにはお手伝いをした。昭和35年完成のときのことは直接は分からない。
槇谷委員長	各階の呼び方が3階か4階とあったが、どこで変わったのか。理由があるのか。
事務局	平成元年に実施した耐震診断のときの言い方(資料1のP16)で、B1、1、M2、2、M3、3、Rといているが、天守閣では完成当初から中4階、4階といており、変わらない。その後の構造図面も、屋根のところまで3層ということで分けていると思われる。
矢野代表	必ずしも、復興天守閣の階と、こうであつたらうという木造での階とは一致しないことになる。
槇谷委員長	木造のイメージからすると、3階というのが高さとしては当たっているかもしれない。4階となると木造としては相当高い。
矢野代表	この3階の規模からすると、5重の建物の模型もあるが、そのくらいのものも可能である。全体をシンプルに大きくできているのが特徴である。

榎谷委員長

構造的には、専門家がみても、一重目の柱が上と同じところに入ってきて、2重目の外壁になり、同じように、3重目の外壁になるという、シンプルになっている。いわゆる層塔式という形式。時代は途中で燃えてしまったため変わるが、その辺りの話も含めて、西先生の方からいただけたら。

先ほど後藤先生からご指摘があったが、全体で12本の柱がメインで、周辺が二次部材的なものでできている。結構重量としてはあるので、12本の柱で全重量を負担させるのは結構きつい。計算しないと分からないが、柱が耐震性不足という結果も出ているので、柱を補強しないと大地震には抵抗できないと言える。

(3) 天守閣の基礎資料の収集について

事務局より資料3について説明がなされた。(要旨)

- ・ 木造再建の可能性を検討する基礎資料として収集したもの
- ・ 古写真1、模型4、古図5、その他絵図等26点
- ・ 天守閣の変遷 寛永10年1633年の改修、宝永の再建1703年
- ・ 模型のうち、小田原城天守閣に展示してある東大蔵模型、大久保神社蔵模型については、コンサルタントが実測し、資料3-2として図面を作成した。
- ・ 確実に天守として載っているものとしては加藤図があり、3重で描かれている。正保図は幕府に出した図面なので、精度が高いものである。元禄地震の前の天守絵図は、本丸御殿が描かれているため、消失前の天守と考えられている。併せて正確だといわれているものは、P4の宮内庁図で、こちらも3重で描かれている。P5左側、11番小田原城并見附図は、江戸末期と考えられており、本丸だけでなく全体の平面が描かれており、復元した銅門、馬出門の基礎資料となった。この他に精度の高いものとしては、14番文久図であり、石垣も含めて精巧に描かれている。その他はデフォルメされているので、参考程度の資料である。
- ・ 現在のところ、文化庁の「史跡整備の手引き」やこれまでの資料を考えると、史跡内の建造物については、史跡に忠実に復元する必要があるとなっているので、外観の詳細が分かる古写真、建物の寸法や構造が分かる絵図面や設計図、調査によってきちんと遺構、礎石なり、建物が分かるものの3点が揃わなければいけないと言われており、小田原城については、古写真や詳細な設計図などが揃っていないという状況である。

後藤副委員長
事務局

11番の小田原城見附図は、天守閣の平面の寸法は出ているか。
一部出ている。柱間も分かる。

後藤副委員長
事務局

模型の中ではどれと合うのか。
この図面ではないが、5番の元禄地震前天守絵図で藤岡先生も論文の中で引用されて検討されているので、まずはその解析をする必要があるのでは。

赤澤主任研究員

柱間も東大模型とは合っていない。

後藤副委員長

模型がひとつしかなければ他の史跡で復元されているものよりも根拠になりえるが、小田原城の場合は資料がありすぎて、確かなものが分からなくなってしまう

っている状況である。他の史跡で復元されている建物でもここまで資料が揃っているところは多くない。よって、文化庁記念物課の基準を満たしていないとは、私は思わない。

小出委員
事務局
矢野代表

それぞれに何の目的で作られたかは記録にあるか。

全くない。

5番の元禄前の図では8間で、模型は、9間に11間であり、一回り大きい。1間を6尺5寸と、同じとすれば、比較的規模が少し大きくなった可能性がある。

榎谷委員長
矢野代表
榎谷委員長
矢野代表
西委員
榎谷委員長

大久保模型は、真中が円柱の心柱を使っているようだが。

8角である。

なぜ8角にしたのか。塔のイメージがあるようだが。

真中で下から上に柱が通る形式。

四天柱形式と心柱形式がある。実際に松本の古天守は心柱を使っている。

色々な資料が出てきているのは分かるが、ひとつとして同じではない。似たようなものがない。

事務局
西委員

これからこういった形で調査を進めていくかをご指導いただければと思う。

しばらくは使用して寿命を長くして、その後天守閣が何年もつかということになると思うが、木造で建てたいといっても建てられないと分かった場合は、どうであろうとこれを補強するか、壊してもう1回作るしかない訳で、木造が可能なのか、実際にやるかどうかは別として、できるのかどうかを検討しておかなければいけないのではないかと。後藤先生のおっしゃったように、資料はたくさんあるが、絵画資料は使い物になるのは、平面的なものが分かる3つくらいで、信頼度は低い。この場合は、発掘成果がない。昭和の天守を作るときに発掘をやっていないのでは。非常に残念。掘ったら下から石垣が出てしまって大騒ぎをする訳だが、そのときに慎重にやっておけばよかった。そのときの事情を考えると、石垣そのものが崩れてしまっていて、3年くらいかけて石垣の積み直しを募金をして行っている。石垣そのものも歴史的信頼性がないので、発掘していないのもやむを得ないとも思う。したがって、発掘成果がなく、図面類で立面が分かるものがほとんどないので、必然的に模型に頼らざるを得ない。模型の調査を相当しっかりやらないといけないが、なぜ作ったかが大事で、それによって作り方も変わるし、信頼性も変わる。外観だけでよければ、中はいいかげんに作る。模型が残っていて現物と対照できるものもあるが、例えば松江城の場合は修理するために作ったと言われている模型があり、それを元に木造で建てられているが、比較すると正しい。松江の場合は、高さ関係は少なくとも2割程度は増している。模型は高さを強調するのが普通である。長崎の出島の場合もオランダに模型がたくさん残っていて、使えるかと思ったが全然使えなかった。資料はあるが、慎重に検討しないといけない。慎重に検討して、本当に建てられるのかを今から検討して

	<p>おかないと、建てたいという希望が強くなってきたときに、建てられないとなる ともったいない。</p>
榎谷委員長	<p>非常に重要な問題である。</p>
矢野代表	<p>模型の検討はまだ途中の段階である。内部がまだ詳細に図面を作成できていな い。いくつか模型があり、なぜ違いがあるのか、分かっていない。絵画資料はあ くまでも何重ぐらいしかわからなく、それも違ったりする。今残っている建物と、 明治時代の写真があるものでも、途中の絵画資料が色々変わることもある、いわ ゆる絵図資料と平面があるものとは資料の精度が違ってくる。その辺りも検討 していかないといけない。</p>
榎谷委員長	<p>この委員会のひとつの課題で、木造で再建できるかを検討しないといけないと すると、そのようなことも問われるだろう。</p>
西委員	<p>資料について西暦しか入っていないものもあるが、和暦と西暦と両方いれても らいたい。</p>

(4) その他

榎谷委員長	<p>資料3についてもひと段落したが、資料1から3についても、もう一度何か聞 いておきたいことがあれば、どうぞ質問いただきたい。</p>
鳥居委員	<p>資料3だが、絵画作品を歴史資料として採用する場合、信頼性についてはかな り注意が必要。一般に絵というのは、見る者に描かれた物のイメージを分かりや すく伝える事に絵師は力を注ぐため、人々がイメージしやすい城の姿を描く事 が多く、実際にスケッチをして作られている城の絵は、かなり少ないと言ってよい。 例えば P5 の絵巻物や資料4の浮世絵を検討用の資料として採用する必要はない のではないかと。資料とするためにはかなり慎重な選択が必要である。P4の東海道 分間延絵図は、幕府が道中奉行に命じて作らせたもので、かなりきちんと作られ ているものではあるが、小田原城の天守は4層で描かれている。絵師には城のイ メージとして4層の天守があつて、単にそれを当てはめたといえるのではないかと。 検討資料として採用する場合は、慎重に検討し、取捨選択が必要である。</p>
榎谷委員長 事務局	<p>扱うときには慎重に、信頼性の高そうなものを選んで次の段階に進むのだろう。 藤岡先生の設計時にも絵図はあつたが、検討に値しないということになったと 思われる。</p>
小出委員	<p>資料1だが、平成元年の診断を編集したものと思うが、その際に P3 や P4 あた りの膨大なページを苦勞して集約し再編集したもので原型と違うのだと思うが、 そういうものと、コピーだけとったものなど何種類かあるようだが、はっきりさ せた方がよいのではないかと。今回検討された結果と、前回の診断をそのまま出さ れたものと、分けていただいた方が、余計な心配をしなくて済むのではないかと。</p>
榎谷委員長	<p>理解しやすいものにしていただいた方がよい。素直に元の計算書に基づいた報</p>

告書だけでもよいのではないか。平成元年当時の調査のやり方と現在はずいぶん変わってきている。当時はまだ耐震診断初期のころであるので、比較的基本的な調査が主で、突っ込んだ調査がほとんど行われていない。現在であれば、ひび割れもスケッチされ、不同沈下も調査され、全部計算に入る。計算上必要な調査を次の段階ではする必要があろう。平成元年の診断は参考という形でいた方がよいのではないか。この当時は重要度係数といったものはなかった。現状と若干乖離しているところもあるかと思う。内容的には概ね理解できた。

西委員

この委員会の非常に大きな課題が2つあるが、耐震改修をどうするかが喫緊の課題、それと関連は深いが違うものとして、木造でできるかどうかがある。難しい問題を含んでいるので、簡単にできるものではないが、やはり検討しておかないと、鉄筋コンクリートがダメだとなったときに、木造もダメとなることも有り得る。これは研究に近い。資料集めもそうだが、相当経験や知識も必要である。何か検討する組織かグループを立ち上げてしっかり検討した方がよいのでは。この委員会で議論がするのは難しい。すぐに立ち上げるのは難しいとは思いますが、3月までにある程度の答えを出さないといけないのであれば、検討が必要なのではないかと思うので、お考えいただければと思う。

榎谷委員長

同感である。本委員会で可能か否かを判断するのは難しい。市民の期待は大きいと重いが、影響も大きい。かなり慎重に扱わないといけないと思う。ワーキンググループのようなものを立ち上げていただいて、専門の方にご検討いただいたくなど、事務局にお考えいただきたい。

後藤副委員長

史跡の中で再建されているものがあるので、それらがどの程度の資料でやっているのかを比較するとよいのではないか。

小出委員

調査整備委員会があり、全体の整備基本構想を見直さないといけないという話もある。この場だけで結論をだすものではないのでは。市はどのように考えているか。

事務局

基本的に、耐震改修は喫緊の課題であり、きちんと、どのような耐震の工法があつて、どのようなスケジュールでやるとどうなるかをやりたい。それとは別に、木造での再建の可能性については、今からスタートしてやりたい。今までは、木造で再建したいという人がいて、建てるのに100億かかる、200億かかるという人もいれば、一方で30億など様々な意見があり、はっきりしなかった。今回は基礎調査を委託し、諸々のことを整理していく。木造で再建するにはどういった条件があるか、どういった資料が今あるのか、耐震改修は、平成元年の資料ではどれだけよくないのかといったことを含めて、今後のスケジュールを検討していく。

ここでは一定程度の方向性を、今ある資料を元にお出ししていただいて、それとは別に、次のステップがあるのではないか。耐震改修にしても、今年度は方向性を出すだけで、来年度以降に耐震診断をし直して、基本計画、基本設計、実施

設計、その中には展示リニューアルの詳細な実施設計も含まれるが、それらを順番に行っていくことになる。

後藤副委員長

展示によって補強のできるものとできないものがあり、補強のレベルも変わる。中性化を根本的にやり直すのもひとつの方法だが、とりあえず、中性化をしたら全部ダメというものではなく、水が入ると錆びやすくなるので、現状の外装をして内装もしている状況だと、雨さえ入ってこなければ中性化しても騙し騙しで持つことは持つので、そのレベルで止めるのかでも随分コストは変わってくる。診断の後の検討になるが、耐震改修の方も方法によって随分幅がある。

飯沼委員

木造に関する、これならできる、ここは問題だ、ここはどうなっているのか、といった資料は、次回以降出る見込みなのか。

事務局

出したいと思うが、具体的な形では相当難しい。

飯沼委員

あと何回かしか会議がないのに、この委員会の落としどころが見えない。木造のことひとつについても、専門的なことを検討するにはあまりにも時間がないだろうし、いいとか悪いとかの判断ができるのか。それができないとなると、耐震改修も、とりあえず何年かもたすならこう、きちんとやるならこう、といったことを、最終的に委員会としてどのように答申したらよいか、何となく見えない。次回以降どのような形になるのかも見えない。

後藤副委員長

私の印象では、今日でてきている結論は、木造の可能性はゼロではない。きちんと検討すると、可能性を探ることはできるだろう。できるかできないかはまだ出せないが、検討を深めれば、可能性のありなしがより分かってくるので、やる必要があるというのがひとつの結論。耐震診断の方は、平成元年の診断はやり方が古いので、精度を高めて細かいところまで進まないといけない、というのが今日までの結論で、次回にどこまでどちらにいくのかは、おっしゃるとおり見えていない。今日は、ある程度の方向性は出ているのではないか。

楨谷委員長

市の方では、方向性をどのように、どのあたりを考えているか。イメージがでてこない、なかなか議論が進まない。

事務局

今回は、当初の計画では12月に第3回の会議を開催し、2月に第4回目を開催し、3月には委託調査の報告があるので、それと合わせて結論を出していただく。よって、1回ないし2回、検討会の会議が足りないような状況であるので、その点は精査をし、今回は具体的にできなかつたが、次回にお示ししたい。第3回の会議では、同時進行で行っている作業が、今回はここまでしかお示しできなかったが、耐震の工法のいくつかのパターン、展示のリニューアルの問題、バリアフリーの問題など、課題としなければいけないことは、今回は濃い薄いはあるかもしれないが、ひととおり検討の材料をお出しできるようにし、スケジュールや方向性も出てくるのではと思う。

楨谷委員長

耐震改修の方向性を出すのは難しくないと思うが、展示リニューアルも重要な審議事項であるので、今回は資料を必ずだしていただきたい。3番目の木造での

再建については重たい課題であるので、皆さんのご意見を聞いて、問題点をまとめて答申する形になるのかもしれない。できるかできないかを、この委員会で結論づけるのは非常に難しい。簡単には言えないので、慎重に議論して、こういう問題点があるというところでまとめるかもしれない。方向性としては、可能な方向性はあるという示唆ぐらいはできるかもしれないが、結論は難しいかもしれない。あと3回会議が予定されているが、資料によるところが大きいので、できるだけ検討資料は出していただき、結論に近いものを出していきたい。耐震改修の方の資料はでてきたので、大体分かったので、私はイメージはできた。展示リニューアルはある程度できると思うが、特に木造は難題だ。第1回の会議では、防災の問題や避難の問題も出されていたが、それらを踏まえて、市としてはどのように対応するか、バリアフリーをどうするかといったことを、次回は資料を出していただきたい。

鳥居委員

展示を考える際、バリアフリーは施設の基本的な考え方として位置づけるべきである。また、今後天守閣がどういう展示を目指すのかという部分が出ないと検討のしようがない。展示に関する資料は、前回の会議で大体把握はできたが、耐震改修によって面積も減るであろうし、もう少し絞りこまないと、計画が立てられないのではないかと。繰り返しになるが、どういった展示をするかという基本的な考え方を決めないといけない。

事務局

それらも含めて、次回には資料としてお出しする。具体的な課題が見えてきたので、次回の会議前に、専門の委員に事前にご相談やご意見を伺うなど、もう少し詰めた形で行いたい。

2 その他

次回の会議の日程を調整し、12月15日（木）13:30～に開催することで決定した。
当日都合がつかない矢島委員には、事前にご指導させていただくこととする。